

資本主義の基本矛盾について

角 田 修 一

- 一 はじめに
- 二 「社会的生産」についてのエンゲルスとマルクスの見解
- 三 「社会的生産」についてのレーニンの見解
- 四 「資本主義的取得」のとりえ方
- 五 資本主義の基本矛盾の意味
- 六 あとがき

一 はじめに

資本主義経済の基本矛盾⁽¹⁾とよばれる「社会的生産と資本主義的取得との矛盾」は、生産諸力と生産諸関係との矛盾の特殊資本主義的形態の一つであるとともに、資本主義経済のあらゆる現実の特殊な運動形態をつらぬく普遍的な矛盾であり、その否定は社会主義への移行をもっとも基本的なところで根拠づける矛盾である。この意味で、戦後わが国で展開された様々な経済学上の論争——恐慌の本質規定をめぐる論争、国家独占資本主義本質論争、企業ならびに社会を管理する労働の本質やその発達と社会変革をめぐる論争、現代社会主義論争など——が、

資本主義の基本矛盾について（角田）

四一一（八九五）

直接間接にこの「基本矛盾」(以下簡単にこのようによぶ)を問題にしてきたのも当然のことであった。

たとえば恐慌論をとりあげてみれば、戦後すぐに山本二三丸氏が山田盛太郎氏にたいする批判のなかで、いわゆる「生産と消費の矛盾」からは恐慌を説明できないとされ、この「基本矛盾」から恐慌を説明すべきであるとされたのたいし、宇高基輔氏が、山本氏の「生産と消費の矛盾」の理解はマルクスの再生産表式論を媒介しない過少消費説的なものである、と反論されたことが有名である。両氏がともにレーニンを援用して各々の主張をされたことは奇妙でもあり、またそこに一つの問題を提起していたように思われるが、⁽²⁾その後の恐慌論研究は「生産と消費の矛盾」の展開を再生産表式のうえでおこなうのが主流になっており、「基本矛盾」からの展開はむしろあまりおこなわれていないのが実情である。それとは別に、久留間鮫造氏が『マルクス経済学レキシコン』⁽³⁾⑦ 恐慌Ⅱ(一九七三年、大月書店)の棗において、エンゲルスの「基本矛盾」とマルクスのそれとの違いを指摘して、両者はある意味で同一の矛盾の別様の表現だといえないこともないが、エンゲルスのような表現では、「基本的矛盾」が「生きている矛盾」として周期的に恐慌に直接結びつくかたちでは表明されない、といわれた。久留間氏は、エンゲルスのような把握の仕方では、資本主義の相反する二つの性格がますます顕著になって矛盾がますます増大する、ということは明らかになつても、「それらの性格はたえず抗争するものとしては、したがって矛盾もまた『活き活きした矛盾』としては、あらわれないうらみがある」といわれるのだが、⁽³⁾はたしてそうであろうか。筆者は、あらゆる矛盾は生きている矛盾であり、それ自身の運動形態を展開するものとしてとらえられなければならないと考える。

この恐慌論にみられるように、これらの論争において「基本矛盾」の意味はかならずしも正確にとらえられて

いるとはいえない。これはとくに宇野弘藏氏らによる「基本矛盾」批判論に顕著である。しかし他の論者のあいだでも「基本矛盾」の意味内容をどのように理解するかについて意見が異なっているし、なかには宇野氏らとはとんど変わらない理解もみられるのであって、そのために全体として宇野氏らの批判に十分応えられていないように思われる。

この宇野弘藏氏による「基本矛盾」批判はつぎの三点にまとめることができる。これらはいわゆる宇野理論にたつ人々がほとんどそのままくり返しているものである。その第一は、「基本矛盾」の矛盾としての性格それ自体を否定することであって、宇野氏によれば、「生産の社会的性格と取得の資本主義的形態とは、……ただ一方が社会的なのに、他方が個人的だという点で対立しているということをいうだけ」で、氏自身という「労働力の商品化と同じ意味では矛盾するとはいえない」⁽⁴⁾のである。第二は、恐慌Ⅱ産業循環の説明における「基本矛盾」の役割を否定することである。宇野氏によれば、「基本矛盾」は「恐慌現象のような、現実的に解決されながら発展する矛盾を動力とするものの解明に役立たない」⁽⁶⁾とされる。第三は、一般に社会科学は資本主義社会変革の対象と主体までは明らかにするがその必然性までも説明するものではないという氏独自の見解にたつて、その「変革の要点」すら「社会的生産と私的所有の矛盾というようなもので明らかにすることではな」⁽⁷⁾く、エンゲルスは「恐慌の根源としての資本主義社会の矛盾をもって、直ちに資本主義社会への変革の基礎と同一視した」⁽⁸⁾と批判し、資本主義社会の変革を根拠づける矛盾という「基本矛盾」の重要な意味内容をまっこうから否定されることである。

このような宇野氏による「基本矛盾」否定論ならびに「労働力商品化」Ⅱ根本的無理説⁽⁹⁾にたいして、「基本矛盾

「盾」を認めて諸説を展開する人々はその意味内容をどのように理解してきたであろうか。ここであらかじめ筆者の見る限りでそうした諸見解のタイプを示しておくことが便利であり、必要であるように思う。その第一のタイプは、資本主義の基本矛盾を事実上商品生産一般の矛盾である私的所有と社会的生産との矛盾、あるいは私的労働と社会的労働との矛盾に還元するものである。それは主観的にはエンゲルスの説明が資本主義の矛盾をのべたものとしながら、その内容を商品生産の矛盾におきかえているのだが、そのために資本主義に固有な矛盾である「基本矛盾」の意味が失なわれてしまっている。第二のタイプは、逆に、第一のタイプのとらえ方がエンゲルス自身に固有なものと考え、エンゲルスのいう「基本矛盾」（本稿でとりあげているもの）を批判してマルクスのいう基本矛盾（五でとりあげる）との違いを指摘するものである。この見解は一般に商品生産一般と区別される資本制生産に固有な基本矛盾をとらえようとする点で正しいものを含んでいるが、第一のタイプの理解をエンゲルス独自のものとみたり、マルクスのいう基本矛盾との差異を強調することには賛成しがたい。第三のタイプは現在もっともひろくみられるもので、代表的にはかつてのソ連邦「経済学教科書」のように、「生産の社会的性格と取得の私的資本主義的形態とのあいだの矛盾」と表現されているものである。レーニンを下敷にしたと思われるこのいわば通説的理解は、筆者の見る限り、資本主義に独自のものと商品生産一般との単なる並記もしくは折衷・混同になっており、そもそもエンゲルスの規定と異なったものであるだけでなく、レーニンの規定自体をも正確にとらえていないものである。

以上のように、「基本矛盾」の意味内容の理解は、マルクス、エンゲルス、レーニンの三人のあいだにこの点で差異が存在するという重要な論点を含んでいるわけである。以下の論述ではこの「基本矛盾」の概念を明確に

することに課題を限定し、この概念の把握に関するマルクス以下三人の基本的同一性を論証し、同時に三人の外見上の相違の根拠をも明らかにしようと思う。彼ら三人の差異を強調するのでもあいまいにするのでもなく、彼らの見解をいかに統一的に理解するかが重要である。さらにこのことを通じて宇野氏の「基本矛盾」否定論にたいする批判とともに通説的理解の不十分さをも明らかにしようと思う。以下に、「基本矛盾」を構成する二つの対立項のそれぞれをとりあげ、そのうえで「矛盾」の意味内容をあらためて明らかにする。

(1) 「基本矛盾」(Grundwiderspruch, fundamental contradiction)という用語は、『反デューリング論』から『空想から科学へ』を編集する際にエンゲルス自身が要約として加筆した部分に一回だけ使われたものであるが、この部分は『反デューリング論』の本文には取りいれられなかった(『全集』第二〇巻、大月書店版、序文・卷末資料・注解四二二を参照)。訳語として「根本矛盾」をあてるものも多い(大内兵衛訳『空想から科学へ』と粟田賢三訳『反デューリング論』いずれも岩波文庫版、寺沢恒信・山本二三丸訳『空想から科学へ』国民文庫版など)が、ここでは一般に用いられているものにしたがった。なお、Grundが基礎とともに端初 Anfangs-と主要 Haupt-をも意味するという指摘があることも興味深い(小牧・奥津・佐藤『岩波独和辞典』一九五三年)。

(2) 山本二三丸『増補・恐慌論研究』(青木書店、初版一九五〇年、増補版一九六五年)、宇高基輔「再生産論と恐慌との連繫について——山本二三丸著『恐慌論研究』によせて」(東大『社会科学研究』第三巻第一号、一九五一年二月所収)。

(3) 久留間敏造編『マルクス経済学レキシコン 7 恐慌Ⅱ』(大月書店、一九七三年九月)所収の栞、一一ページ。

『岩波・経済学辞典第二版』(一九七九年)所載の大谷禎之介氏の筆による「資本主義の基本矛盾」も同一の趣旨と思われる。両氏はエンゲルスの「基本矛盾」が周期的恐慌の過程を規定する矛盾としてマルクスのものに比べ適切でないといわれているのであって、資本主義の歴史的性格を示す矛盾としての適切さは認めておられる。以上念のため。

(4) 宇野弘藏『恐慌論・商業利潤論の諸問題——経済学セミナー』(3)『法政大学出版局、一九六三年』七四―七五ページ。
(5) 宇野氏は、別のところで、「それこそ死せる抽象だ」とか、「問題の矛盾にならないのだ。矛盾というのが対立

しているという意味での矛盾で、そういう矛盾には、現実的には解決されながらもまた拡大した矛盾になるというプロセスがない」とのべている（宇野弘蔵編『資本論研究』Ⅱ、筑摩書房、一九六七年、二八八―二八九ページ）。つまり、氏によれば、「基本矛盾」は、資本主義の枠内で不断に解決される形でくり返し運動する動力になるような矛盾でなければならぬのである。

(6) 宇野弘蔵『経済学方法論』（東大出版会、一九六二年）一三五ページ。

(7) 宇野弘蔵編『資本論研究』Ⅱ、二九八ページ。

(8) 宇野弘蔵『経済学方法論』、一四三―一四四ページ。

(9) 大内力『新しい社会主義像の探究』（一九七六年、労働社会問題研究センター出版局）は、この説による社会主義論の代表といえよう。

二 社会的生産についてのエンゲルスとマルクスの見解

『反デューリング論』第三篇「社会主義」の第二章「理論的概説」は、のちに『空想から科学への社会主義の発展』第三章として抜萃され、ひろく普及している部分にあたる。その内容は、現在の社会制度における生産と交換の様式すなわち資本主義的生産様式がもたらす衝突の根源を明らかにし、その現実的な解決の手段と道すじを科学的に証明するものである。そこでの中心命題が資本主義の「基本矛盾」であって、エンゲルスによれば、「今日の社会がそれらのなかで運動し、大工業がそれらを明るみに出すところのいっさいの矛盾」はこの「基本矛盾」から生まれる。そこで彼は、近代の社会主義思想が資本主義的生産様式とこのもとでつくりだされた生産諸力との衝突を思惟において反映したものだとし、さらにこの衝突がいったい何であるのかを探求する。つまり、エンゲルスは、近代資本主義社会の生産諸力と生産諸関係との衝突を自明のものとしたうえで、その本性をさら

に求明するように問題をたてていることに留意しなければならない。

そこではまず、中世の人格的に自由な小農民の農耕、あるいは反対に、隷属した小農民の農耕、都市手工業をとりあげ、それらを小経営とよび、この小経営の基礎を「労働する者が自分の生産手段を私有すること」にもとめている。この小経営という生産様式においては、生産手段はもっぱら個人的使用を目的にした小規模なもので、生産者のあいだに分散して存在している。仕事場は個人的なものであり、生産は個人的行為であり、生産物は個人的な成果である。これにたいし、資本主義的生産様式は、これらの分散した、狭隘な生産手段を集積された「社会的な生産手段に変え」、「幾百、幾千人もの協働を要する工場」を出現させ、生産そのものを一連の社会的行為とし、生産物を社会的な生産物すなわちその工場における「多くの労働者の共同の生産物」にする。このようにエンゲルスは、中世の個人的生産に社会的生産を対置し、これを資本主義的生産様式に独自の生産方法とみている。

エンゲルスが『反デューリング論』を執筆したとき、マルクスの『資本論』は第一巻のドイツ語初版（一八六七年）および第二版（一八七二―三年）とフランス語版（一八七二―五年）とがその材料として与えられていた。彼が「現代の衝突」を探るうえで中世にひろく存在した小経営からはじめたことは、『資本論』第一巻における「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の発端部分とまったく一致している。マルクスによれば、「資本の歴史的生成」は、「奴隸や農奴から賃金労働者への直接的転化でないかぎり」⁽¹⁾、「自分の労働にもとづく私有の解消」であったが、労働する人間による私有は「小経営の基礎」であり、この小経営自体は「奴隸制や農奴制やその他の隷属的諸関係の内部でも存在する」⁽²⁾ものであった。マルクスは、歴史具体的過程として、小経営がそうした隷属的形態を脱

けてた状態を、したがって自己労働にもとづく自由な私的所有を基礎とする状態を現実の出発点におき、それが資本主義的私有によって駆逐される過程を中心に叙述したが、この特殊西ヨーロッパ的な移行形態は、本源的蓄積の基本が小経営生産様式の収奪、解体である、という一般性をいささかも否定しないし、むしろ明瞭にさえしている。すなわち、『資本論』では、「個人的で分散的な生産手段の社会的に集積された生産手段への転化」、「同一の生産過程のなかでの協業や分業、自然にたいする社会的な支配や規制、社会的生産諸力の自由な発展」、「労働の社会化、および土地その他の生産手段の社会的に使用されるものすなわち共同的生产手段への転化」、「結合的社会的労働」などが、「独自の資本主義的生產様式」としてとりあげられている。エンゲルスという「社会的生産」は『資本論』にいうこれらの事柄を意味しているのであり、それは単純には「社会的労働」と「社会的生産手段」との二契機から構成されるものと考えられる。

このように、「社会的生産」は、個々の企業(ここではイコール工場)における生産の社会化であり、「マルクスもエンゲルスもこの意味だけを含ませていた」⁽⁵⁾とする吉村達次氏の理解は正しい。それは、資本主義生産以前の諸社会の小経営もしくは自由な個人による私的な商品生産と比べた「独自の資本主義的生產様式」とその発展を特徴づけるカテゴリーだからである。

ところが、この「社会的生産」を、商品生産一般もしくは資本主義以前の歴史上の小商品生産にみられる、社会的分業にもとづく生産者および生産(物)の社会的関連だとする見解がある。このうち最も典型的なものとして、多くの人(山本二三丸、岡稔、⁽⁶⁾藤塚知義氏ら)によってとりあげられ、批判された見解は、次のようである。「単純な商品生産においても、すでに、各生産者は、結果からみて、それぞれ他人の欲望をみたすために働らいてい

る（社会的分業）のであるが、しかも彼等はそれを具体的に意識せず、銘々が自分の見込みにもとづいて勝手に働らいている。生産はすでに社会的性質をもっていながら、労働は私的（個々別々の）形態をとっている。これは明らかに矛盾である。資本主義のもとにおいては、この矛盾はさらに発展して、生産の社会的性質と領有（取得——引用者）の私的＝資本主義的形態の矛盾となる。資本主義のもとでは、商品生産が最高度に発展し、生産の社会的性質は、ますます強くなる。⁽⁸⁾「見られるように、ここでいわれる「生産の社会的性質」は商品生産に特徴的なもので、資本主義のもとではそれがただ量的に拡大されるものとなっている。ここから、「基本矛盾」は生産の無政府性の激化となってあらわれるとされ、たとえば恐慌がこのことを軸として説明されることになる。

こうした理解は、漠然とした形で多くの人に存在するようだが、明らかに先にみたエンゲルスのいう「社会的生産」とは異なっている。商品生産に特有な社会性について、エンゲルスは、『反デューリング論』第三篇第四章「分配」のところ、商品とは社会的（といっても他人の）消費のために生産される私的生産物である、とのべてつぎのように論じている。すなわち、それらの商品は当然、「交換をつうじて社会的消費にはいりこむ。」「こうして、私的生産者たちは、ある社会的連関のなかにあって、一つの社会を形成する。それゆえ、彼らの生産物は、各々の私的生産物でありながら、同時にまた——しかし、そう意図してではなく、いわば不本意に——社会的生産物でもある。では、これら私的生産物の社会的性格は何において成りたつのか？ 明らかに、次の二つの性質においてである。第一に、それらはすべて何らかの人間の欲求をみたすものであり、その生産者にとつてだけでなく、他人にとつてもまたある使用価値をもっている、ということである。また第二に、それらは、異なった私的労働の生産物でありながら、同時に、単に人間労働の、一般的人間労働の生産物である、ということである。⁽⁹⁾」

ここでエンゲルスが「社会的生産物」とか「私的生産物の社会的性格」とかいつているものは、明らかに、「商品を生産する労働の特有な社会的性格」⁽¹⁰⁾の結果であり、「社会的労働」というのは「ある一定の、すなわちある社会的な仕方」における私的労働の「社会的性格」のことにほかならない。この意味での社会的労働は、言葉としては同じであっても、工場(企業)内の直接に、共同的な、「協働、Zusammenwirken」という場合の社会的労働⁽¹¹⁾とは、本質的に異なったものである。後者は資本主義的生産の独自の形態であるのにたいし、前者はその前提となる商品生産における商品の交換を媒介とする社会性である。

この点で、マルクスは、『資本論』第一卷第四篇の「相対的剰余価値の特殊な生産方法」を考察するところで、労働の編制における変化を、資本主義的生産の「歴史的かつ概念的な」出発をなす「協業」から「分業」にもとづく「協業」、そして労働手段である機械そのものが技術的に命ずるものへと、たどっている。ここで詳細に論じる余裕はないが、生産の主體的契機である労働の「社会化」についてみると、協業とともに共同的な結合労働が生まれ、これを「直接に社会的なまたは共同的な労働」とよび、機械はこの労働によってのみ機能するとされている⁽¹²⁾。そして、この「直接に社会的なまたは共同的な労働」こそ、資本に独自の歴史的な性格を明るみに出すものと把握されている。すなわち、商品を生産する私的労働は、生産物の交換関係を媒介とし、これによってはじめて社会的労働として現われえたのにたいし、資本主義的生産において再び、諸個人が自分たちの労働において直接に社会的な関係をとり結ぶという事態が、さしあたり資本というなお私的な対立的な形態のもとで、つくりだされるのである。ここで「再び」というのは、マルクスが商品の物神的性格のところで考察している商品生産以外の他の生産形態のなかに、これとまったく同じ事柄——「共同的な、すなわち直接に社会化された労働」⁽¹³⁾——がみられ、

それは、「すべての文化民族の歴史の発端」における自然的な労働形態、および、「もっと手近な例」としての自足的な「農民家族の素朴な家長制的な勤勞」においてみられるからである。

商品を生産する労働の独自の「社会的労働」が、いまのべた意味での「直接に社会的な労働」に転化すること——これこそ資本主義が独自につくり出す物質的基礎であり、同時に社会主義の物質的要素になるもので、エンゲルスのいう「社会的生産」はこの「直接に社会的な労働」の意味を含むものにほかならない。

もちろん、他方で、つぎのことを忘れてはならない。「協業や工場内の分業や機械の応用による、そして一般的に言えば、特定の目的のために、生産過程を、自然科学や力学や化学などの意識的応用へ、すなわち技術などの応用へ転化させることによる、そしてまた、これらのすべてに対応する大規模な労働などによる、……直接に社会的な、社会化された（共同的な）労働の生産力、……これらはすべて資本の生産力として現われ、……いずれにせよ、個々の労働者の生産力としても、生産過程で結合された労働者の生産力としても現われ⁽¹⁴⁾。」つまり、「労働者の労働の『社会的なもの』は、労働者にたいして、単に外的にだけではなく、敵対的かつ対立的に、そして資本において対象化され人格化されたものとして相対する⁽¹⁵⁾。」ということがそれである。このように、資本が「直接に社会的な労働」を私的労働として自分のものとし、そのうえに商品を生産する私的労働の「社会性」が現われるという二重性を理解しなければならぬ。つまり、資本主義は商品生産の一形態として登場するから、工場内の「直接に社会的な労働」は資本による私的労働としてあらわれ、その私的労働が商品交換を媒介して「社会的労働」となるのである。

以上に見たように、社会的分業による生産者の結びつきと、工場などにおける労働者の結合とは、まずはつき

りと区別することが必要であり、「社会的労働」とか「社会的生産」とかいった言葉の同一性に惑わされてはならないのである。マルクスは明確に次のようにのべている。

「一つの社会の全体のなかでの分業は、商品交換によって媒介されているかどうかは別として、もっともさまざまな経済的社会構成体に属するのであるが、マニユファクチュア的分業は、資本主義的生産様式のまったく独自の創造物なのである。」⁽¹⁶⁾

また、ある箇所では、生産の形式的社会化と実質的社会化という区別をしていることに注目したい。

「……もしわれわれが「諸資本の集中という——引用者」この事実から資本主義的生産の基礎上でこの事実を特徴づけている対立的な性格をぬぐいとれば、この事実は、この集中の進展は、何を表わしているだろうか？ それは次のこと以外のなものでもない。すなわち、生産がその個人的性格を失って社会的過程になるということ、しかも、交換の行われるすべての場合に、生産者たち相互間の絶対的依存性と、彼らの労働を抽象的社会的労働（貨幣）として表示する必要があることによって、生産が社会的である、という形式的な意味ではなく、実質的に社会的過程になるということである。これは、生産手段が共同的生产手段として、したがってまた個人々の所有によってではなく、生産に対するその関係によって——すなわち社会的生産手段として——充用され、同様に労働もまた社会的規模で行なわれる、ということによるのである。」⁽¹⁷⁾

資本主義に独自の生産の社会化は、当然、ここでいう「実質的な」社会化であって「形式的な」社会化ではない。「基本矛盾」でいう社会的生産はこの実質的社会化にあたる。そして、『資本論』と『反デュリング論』は、商品生産の資本主義的生産への転化にともなう形式的社会化の実質的社会化への転化を問題にしているのである、この点で両者のとらえ方はまったく同一なのである。

(1) この限定はフランス語版にはない。

(2) 中村哲『奴隷制・農奴制の理論』（東大出版会、一九七七年）によれば、マルクスは、奴隷制・農奴制の労働過程

は基本的に小経営生産様式であり、所有関係からみれば自己労働にもとづく労働者の私有と他人労働の搾取にもとづく非労働者の私有との結合形態だととらえていた。この小経営生産様式の重要性を明らかにしたのは栗原百寿『農業問題入門』(有斐閣、一九五五年、のち青木文庫)であるとされている。

- (3) これは、マルクスが、フランス語版において、この過程を西ヨーロッパ諸国に限定した理由である。林直道編訳『資本論第一巻フランス語版』(大月書店、一九七六年)一三一ページ。マルクス「ザスリーチあての手紙」一八八一年三月八日、『全集』第一九巻、二三八ページ。

- (4) 中村哲、前掲書参照。

- (5) 吉村達次『恐慌論の研究』(三一書房、一九六一年)、二二二ページ。なお、仲村政文「資本の蓄積と労働の社会化」『経済』一九七六年一〇月号)は、「労働の社会化」を資本蓄積の過程に位置づけることによってその一面化から免れる必要を指摘したすぐれた論文であるが、この吉村達次氏の理解を一面的だとされた点には賛成しがたい。また、山本二三丸氏も、最もはやく、「基本矛盾」に関する誤解を批判した論文のなかで、「基本矛盾」とそれを構成する二要因をあくまで資本主義的生産様式に特有のものである、と力説されながら、この「社会的生産」には完成生産物にいたる一連の工場(企業)間のつながりをも含めた「二重の意味」をもたせている。山本二三丸「資本主義の基本矛盾についての簡単な考察」、『立教経済学研究』第八巻第二号、一九五四年および、第九巻第一号、一九五五年)。

- (6) 岡稔「恐慌理論の問題点」(『講座恐慌論』Ⅲ、東洋経済新報社、一九五八年所収。のちに、同氏『資本主義分析の理論的諸問題』新評論、一九七五年に所収)。

- (7) 藤塚知義『恐慌論体系の研究』(日本評論社、一九六五年)。

- (8) 川崎巳三郎『恐慌』(岩波新書、一九四九年)三七七ページ。

- (9) 『全集』第二〇巻、三一五ページ。傍点―引用者。

- (10) マルクス『資本論』(『全集』第三巻a)九八―九九ページ。

- (11) エンゲルスは「基本矛盾」を規定する文章のなかで「社会的労働」という言葉は使っていないが、「社会的に労働する工場」という表現をしている(『全集』第二〇巻、二七九ページ)。また、『空想から科学へ』の英語版では「社会化された生産手段と社会化された生産者」という表現がみられる。

資本主義の基本矛盾について(角田)

- (12) マルクス『資本論』（『全集』第二三卷a）四三四ページおよび五〇三ページ。
- (13) 同右、一〇四ページ。
- (14) マルクス『直接的生産過程の諸結果』国民文庫版、八六一―八七ページ。同じく、一三三―一三六ページもみよ。
- (15) 同右、八七ページ。
- (16) マルクス『資本論』、前掲書、四七一―四七二ページ。
- (17) マルクス『剰余価値学説史』（『全集』第二六卷第三分冊）五八一―五八二ページ。

三 「社会的生産」についてのレーニンの見解

「社会的生産」もしくは「労働の社会化」の中に、上述の二つの意味を並列、あるいは「統一」させようとする多くの見解の根拠⁽¹⁾になっているのは、レーニンの一連の叙述である。それゆえ、従来から、マルクスおよびエンゲルスとこのレーニンの叙述との違いが問題になってきた。そこで、つぎに、レーニンが資本主義の基本矛盾を構成する一項の「社会的生産」をどう論じているかをみることにする。結論からさきにいえば、この点にかんするレーニンの見解は、確かに右の二つの意味を含めるものであるが、それは資本制生産のもとでこの二つがとらえられているということであって、それは彼がつねに資本主義による商品生産の拡大・深化という形で当面の問題をすぐれて具体的につかんでいたからこそこの二つの意味をおさえているということである。したがって、レーニンがどちらか一方に力点をおいたとか、エンゲルスの規定の「拡大解釈」だとかいう評価は不正確である。

レーニンは、「資本主義の進歩的な歴史的役割は、二つの短い命題に要約することができる。すなわち、社会的労働の生産力の向上と労働の社会化である」⁽²⁾として、後者すなわち「資本主義による労働の社会化」の現われ

方を次の七つの過程にみいだす。第一は、商品生産の成長による国民的（ついで世界的）市場への結合と「社会全体のための生産」への転化であり、「資本主義が高度に発展すればするほど、生産のこの集団的性格と取得の個人的性格との矛盾がますます激しくなる」ということである。第二は、生産の細分状態にかわる「集積」であり、レーニンはこれを「資本主義の特性の、最も明白な、そして最もきわだった現象であるが、しかしけっして唯一の現象ではない」という。第三は人格的隷属の駆逐、第四は住民の移動性、第五は農業人口の相対的減少と大工業中心地の増加、第六は中世の狭い身分的結合の破壊、競争、階級分裂と階級的団結の促進、第七は住民の精神的变化である。⁽³⁾

ここにみられるように、レーニンはあくまで具体的な資本主義の発展を軸にしているのであって、商品生産一般の特徴をのべているのではない。レーニンは、「一つの工場で……いっしょに勤労する結合された労働者の労働」⁽⁴⁾を、労働の社会化の「最も明白な、きわだった現象」としている。と同時に、「社会化されて一つの経営に集中された」労働が「全社会の欲望の充足を目標にする」⁽⁵⁾こと、「すべての生産が一つの社会的生産過程に統合している」⁽⁶⁾こと、すなわちマルクスのいう「形式的」社会化をも関連させて重視している。

しかし、このことから、「レーニンにおいては、『労働の社会化』とは、第一義的には、労働が上述のような「他人が消費する物をつくるという——引用者」社会的性格を獲得することを意味するのであり、労働が社会化されるためには、生産が工場のような一つの場所で集団的にいとなまれることをかならずしも必要としない」と理解するのは明らかに正しくない。こうした理解は、レーニンが「社会全体の範囲にわたる労働の社会化」をかならず資本の集積すなわち一つの経営への労働の集中にともなって進むものとのべていることを無視し、「資本主

義による労働の社会化」という点を過少評価することになっている。そして、レーニンが使ってもいけない「第一義的」とか「核心」とか「もっとも基本的」とかいう意味を形式的社会化の方に与えてしまっている。

レーニンがミハイロフスキーやニコライ・オン（ダニエリソン）にたいする批判のなかで「労働の社会化」を一つの場所における労働に限定してはならないとのべたのは、「資本主義による労働の社会化」が農村家内工業の破壊によって国内市場をつくりだす面を強調するためであった。ヴァリツキーの研究によると、ナロードニキ、とくにヴォロンツォーフとダニエリソンは社会化された労働の意義を積極的に認めていたのであるが、ロシアではそれを非資本主義的な途によって達成しようとした。⁽⁸⁾これにたいしレーニンは資本主義的大工業が社会のあらゆる側面で社会化された労働を現につくりだしていることを強調したのである。

このように、レーニンが、一つの場所での労働の社会化と生産者のあいだの社会的関連の強化との両方を、単に並列するだけでなく両者の相互関係において正しくとらえていたことは、大切なことである。この点を説明しないで、両方をただ並べるだけでは、レーニンの、そしてまたマルクスやエンゲルスの考え方とは異なったものとなる。

マルクスは、「社会のなかで、偶然的に現われる発展した分業と、工場の中での資本主義的分業とは、互いに制約しあい生みだしあっている」とのべて、その理由を次のようにいう。「なぜなら、商品は……十分に発展した社会的労働の分割を前提するのであるが、他方では、ただ……工場の中での資本主義的分業の基礎上でのみ、すべての生産物が必然的に商品の形態をとるのであり、したがってまたすべての生産者が必然的に商品生産者になるのだからである。」⁽⁹⁾「社会内分業と工場内分業は「本質的に異なっている。」工場内分業は社会内分業を

前提し、これを推進する⁽¹⁰⁾。したがって、レーニンが、この両方を「資本主義による労働の社会化」という表現に「統一」しているのは、資本主義に独自の生産様式と、その商品生産としての基礎とを明確に区別したうえで、前者によって後者が生産の一般的形態にされるという関係を把握しているからである。この点で、『資本論』と『反デューリング論』が、商品生産（その前提である社会的分業）の資本主義的生産への転化という叙述の順序をとっているのに対し、レーニンの場合は資本主義的生産の具体的な成長過程を問題にしているので、商品生産の諸特徴が資本主義的生産の独自の形態を受けとりつつ成長するということにその焦点がおかれた。レーニンが「社会的生産」のなかに個別的生産過程の集団化・共同化とそれらのあいだの社会的関連の強化とを含めたのは、こうした資本主義の把握が根拠になっているからである。

(1) ソ連邦科学院経済学研究所『経済学教科書』（初版一九五四年、改訂増補第四版一九六二年、邦訳、合同出版社、ならびに前掲の山本二三丸、仲村政文氏らがこの見解にたっている。また、高木彰「恐慌論の体系構成における問題点」I~III（『岡山大学経済学会雑誌』第八卷第三・四号、第九卷第一号、同第三号、一九七七年）は本稿の立論と一致することも多く、社会的生産については二様の規定の相違点と連関性を明らかにしようとしたものであるが、そもそもエンゲルスのいう「社会的生産」自体に二様の規定があるとすると本稿の見解とは異なる。なお、先の岡、吉村両氏はマルクス・エンゲルスとレーニンをとを区別する見解であり、藤塚氏も「エンゲルスの規定をより基本的なものとして前提し、この上に乗ってのみレーニンの規定を理解すべき」（前掲書、四二ページ）とされるが、いずれも明確さに欠ける。それは、マルクスやエンゲルスが商品生産一般の社会性を前提にしたうえでその資本制生産に独自の「社会的過程」への転化を叙述したという点が明らかでないからだと思う。

(2) レーニン『ロシアにおける資本主義の発展』（一八九八年）、国民文庫新訳、第三分冊、一九三ページ。

(3) 同右、一九五一年九六ページ。

(4) レーニン「社会民主党綱領草案と解説」（一八九五—一九六年）『全集』第二卷、八四ページ。

資本主義の基本矛盾について（角田）

四二七（九一一）

- (5) レーニン「いわゆる市場問題について」（一九九三年）『全集』第一巻、九七ページ。
- (6) レーニン『人民の友』とは何か（一九九四年）『全集』第一巻、一七三―一七六ページ。
- (7) 富沢賢治『唯物史観と労働運動』（ミネルヴァ書房、一九七四年）一八〇ページ。
- (8) ヴァリツキ『ロシア資本主義論争―ナロードニキ社会思想史研究』（日南田ほか訳、ミネルヴァ書房、一九七五年）一六一―一七二ページ。レーニンも一方でダニエリソンが「資本主義による労働の社会化を正確に特徴づけ、この社会化の二つの標識、すなわち、（一）全社会のための労働、（二）共同の労働の成果を獲得するための個々の働き手の統合、を正しく指摘している」（『全集』第一巻、三三〇ページ）とのべている。なお、田中真晴『ロシア経済思想史の研究』（ミネルヴァ書房、一九六七年）を参照。
- (9) マルクス『直接的生産過程の諸結果』一五五ページ。
- (10) マルクス『資本論』第一巻、四六五、四六三―四六七、四七六、五八一―五八二ページ。

四 「資本主義的取得」のとらえ方

『反デューリング論』は、「社会的に労働をおこなう工場」が商品生産の新しい一形態として登場し、中世における個人的な商品生産のあいだに割りこんで、これらを駆逐し、これらにとってかわったことを描いている。この商品生産を基礎とする新しい、事実上の「社会的生産」はこの社会的生産手段の私有と賃労働にもとづいているので、労働と労働生産物（生産手段と生活手段）とは「それまでどおり」生産手段の私的所有者によって取得される。「各人が自分自身の生産物を占有し、それを市場にもちこむ場合の取得形態」のもとに「社会的生産」がおこなわれる。したがってここでは自分の生産物を市場にもちこむのは資本家で、その生産物を生産するのは賃労働者であるから、取得形態はもとのままでも、取得の性格は自分の労働にもとづかない他人の労働とその生

産物の取得に転化している。⁽¹⁾

このように、エンゲルスのいう「資本主義的取得」とは、生産手段の私有形態にもとづく他人労働の取得様式、もしくは私有の一形態のことであり、「自己労働にもとづく所有」にたいして、生産手段と生産物の私有という形態の同一性と、もはや自己労働にもとづくかずに他人労働によるという内容の差異性において対立関係にある私有として把握されている。

『反デューリング論』における「資本主義的取得」のこのような把握は、『資本論』第一巻第二章第一節における「商品生産の所有法則の資本主義的取得法則への転回」とまったく一致している。マルクスは、貨幣の資本への転化から資本蓄積にいたる『資本論』の叙述にあらわされた資本の「一連の諸運動段階」をふりかえって、「取得様式が、商品生産に適合した所有権には少しも触れることなしに、すっかり変革される」ことを指摘した。⁽²⁾そして、歴史的にみても、賃労働の介入によって商品生産が資本主義的生産に成長・発展していくのと同じ度合いで、「商品生産の所有法則は資本主義的取得の諸法則に転回する」とのべている。⁽³⁾

また、「社会的生産」が商品生産を基礎にしていることについても、『反デューリング論』とまったく同じようにのべている。すなわち、生産力の発展の前提となる大規模な協業は、「生産手段が私人の所有物である商品生産の基礎では、ただ個別資本の増大によって、あるいは、ただ社会の生産手段と生活手段が資本家の私的所有物に転化されていくのにつれて、実現される。商品生産の地盤は、大規模な生産を、ただ資本主義的形態においてのみになうことができる」⁽⁴⁾と。

ところが、基本矛盾の一項の「社会的生産」を社会的分業によるむすびつきとだけ理解するある種の見解では、

取得の「私的」資本主義的形態」といいながら、それは事実上、私的所有にもとづく生産物の私的取得という形態一般に還元されてしまうことになり、これでは、エンゲルスが注意した取得の性格の変革をとらえられない結果になるのは明白である。たとえば、大内秀明氏は、エンゲルスの定式を「生産の社会的性格と取得の私的、性格との矛盾」と勝手に書きかえ、こうした定式では資本主義生産の体制的特徴を単純商品生産者相互の関係と質的に変りえない無政府的生産としてとらえることになる、と批判される。⁽⁵⁾しかし、「基本矛盾」をそのようなものとしてとらえているのは大内氏自身であって、エンゲルスはこの矛盾をかならず「社会的生産と資本主義的取得とのあいだの矛盾」と定式化しており、矛盾の両項ともに商品生産一般とは区別される内容でとらえているのである。

では、レーニンの場合はどうであろうか。彼は「社会的生産」・「労働の社会化」の対立項を、「資本家の私的所有」、「取得の形態」、「私的所有」、「私人による取得」、「私的な取得形態」（以上『人民の友』とはなにか⁽⁶⁾）、「取得の私的・個人的様式」、「取得の私的性格」、「取得の個人的性格」（以上『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて』⁽⁷⁾）、「利潤の取得」（『恐慌の教訓』⁽⁸⁾）、「共同労働の生産物がひとにぎりの資本家によって取得される」（『マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分』⁽⁹⁾）、「少数の人々の私的所有」、「私経済的關係と私的所有者の關係」（以上『帝國主義論』⁽¹⁰⁾）など、多様に表現している。それらに共通した特徴は、たんに私的所有、私的取得と表現されている場合でも、その内容が「資本主義による労働の社会化」に対応する資本主義的私有および取得様式を意味しており、したがって、資本主義的性格を捨象したり商品生産関係一般の私有に還元したりはしていないということである。では、それにもかかわらずレーニンがたびたび私的所有といった一般的な表現をしているのはなぜかといえは、それは、資本主義的私有が、労働する人間と生産手段とを完全に分離し、一方には集中された生産手段の純粋な私有を、

他方には完全に生産手段から切りはなされた労働そのものをつくりだす「私的所有の極致」「完成態」(林直道)⁽¹⁾だからであろう。したがって、ここでもまさに「社会的生産」でみたのと同じレーニンの特徴、すなわち資本主義に独自の性格と商品生産の特徴との両面をつねにおさえるという特徴がみられるのである。

(1) 『反デューリング論』、前掲書、二七九―二八〇ページ。

(2) 『資本論』第一巻、七六〇―七六四ページ。同、フランス語版、前掲書、三六―四〇ページ。

(3) 同右、七六五ページ、およびフランス語版四〇ページ。

マルクスの「取得法則転回」論について、宇野弘藏氏は、「否定の否定」論における第一の否定と同じく、マルクスが与えた「自己労働にもとづく所有」という出発点を「原理論にとつての不純物」として批判される。他方、平田清明氏は、この出発点からの「自己転変」こそ論理―歴史の核心と評価される。しかし、両者は『資本論』を商品生産関係によって一面化してとらえることで共通の土俵にたつたうえで、宇野氏はこれを「批判」し、平田氏はこれを「発見」するといえないであらうか。

(4) 『資本論』第一巻、八一四ページ。

(5) 大内秀明『景気と恐慌』(紀伊国屋新書、一九六六年)五三―五四ページ。

(6) 『レーニン全集』第一巻、一七五―一七六、二二二、二五六ページ。

(7) 同右、第二巻、一五〇―一五六ページ。

(8) 同右、第五巻、八二―八三ページ。

(9) 同右、第一九巻、六ページ。

(10) 同右、第二二巻、二三六、三五〇ページ。

(11) 林直道『史的唯物論と経済学』上巻(大月書店、一九七一年)一七一―一七三ページ。マルクス、エンゲルスの「純粋な私的所有」概念を商品生産・交換の論理だけにとらえることの不充分さについては、藤田勇『営業の自由』と所有権観念(高柳・藤田編『資本主義法の形成と展開』1、東大出版会、一九七二年、所収)が参考になる。

五 資本主義の基本矛盾の意味

資本主義の基本矛盾の両項にかんする以上の検討をふまえて、次に基本矛盾の内容とその意味を考察しよう。

1 『反デューリング論』では、新しい生産様式としての社会的生産が個人々々による私的生産を廃棄するにもかかわらず、後者を前提としていた取得形態に従わせられることをもって矛盾といい、「この矛盾が新しい生産様式にその資本主義的性格を与え、この矛盾のうちに現代のすべての衝突がすでに萌芽として存在する」といわれている。あるいは、『空想から科学へ』で書き加えられた要約では次のようになっている。

「生産は社会的行為になったが、交換と、それとともに取得とはあいかわらず個人的行為であり、個人々の行為である。社会的生産物が個別資本家によって取得される。これが基本矛盾である。」⁽¹⁾

この矛盾は、まず第一に、「新しい生産様式が支配的になればなるほど、……非和解性がますます明るみに出ないわけにはいかなかった」といわれるように、資本主義的生産様式を一般的に特徴づけ、その初めから終りまで固有に存在する矛盾をのべたものである。第二に、この矛盾は、文脈からみて、資本主義的生産様式のもとの生産力の発展とその制限との衝突をさらに特殊な形で規定したものである。一般に「生産力と生産関係の矛盾」は、それぞれの生産様式に特殊な規定を与えなければ、「実在的区別を止揚しない概念の弁証法」⁽²⁾にすぎないと考えられる。

『反デューリング論』におけるエンゲルスのこうした定式化は、マルクスにおいてもみられるであろうか？マルクスはエンゲルスのように「基本矛盾」とはいわなくても、内容的に同じことは述べている。その一つはや

はり『資本論』における「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の叙述であつて、エンゲルスもここから彼の定式化をひきだしたと思われる。すなわち、「資本独占は、それとともに開花し、そのもとで開花した生産様式の極桔になる。生産手段の集中も労働の社会化も、それらの資本主義的外皮と和解できない点に到達する」、がそれである。二つめに注目すべきものは、『反デューリング論』の第三篇が書かれていた時期（一八七七年八月〜一八七八年四月）にマルクスがロシアのある雑誌編集部に送るつもりで書いた手紙（一八七七年一月）の一節である。そこには、『資本論』の「歴史的傾向」が『反デューリング論』の「基本矛盾」により近い形で「要約」されている。すなわち、資本主義的生産は、「同時に社会的労働の生産諸力とすべての個人的生産者の全面的発達とに最大の飛躍をもたらすことによつて、新たな経済秩序の諸要素をみずからつくりだした。また、資本主義的所有は、事実上すでにある集団的生産方法の上に立脚しているので社会的所有に転化するほかはない」⁽³⁾と。三つめに、『剰余価値学説史』と『資本論』第三巻の草稿に、「資本主義的生産の主要事実」として、「一、少数者の手における生産手段の集積。……二、労働そのものの——協業、分業および労働と自然科学との結合による——社会的労働としての組織」をあげ、「どちらの面からみても、資本主義的生産様式は私的所有と私的労働を、対立的諸形態においてではあるが、止揚する」と書かれていることである。⁽⁴⁾同趣旨のことは『学説史』の他のところにもある——「対立と矛盾のこうした極端な形態とともに、生産は疎外された形態においてであるとはいへ、社会的な形態に転化する。社会的労働と現実の労働過程における生産手段の共同性」⁽⁵⁾つまり、生産手段と労働の社会化は私的労働にもとづく私的所有の一形態を資本主義的私有という反対の形態に転化させたにすぎず、なおまだ対立的形態のもとにある、だからそれは自分自身の解消を含むものである、というのである。

これらの例をみれば、マルクスとエンゲルスは基本的に同一の内容において資本主義に独自の基本矛盾をとらえているということが認められる。ところが、久留間氏が指摘されたように、マルクス自身が「基本矛盾」とよんでいるものは次の二つであつて、いずれも右の基本矛盾とはやや異なっている。

「ここではただ、資本が生産の特殊な制限——これは生産のあらゆる制限をのりこえて前進しようとする資本の一般の傾向と矛盾する——を含むことを証明すれば十分である。そうすればわれわれは、過剰生産の基礎、発展した資本の基本矛盾を明らかにしたことになる。」⁽⁶⁾

「シスモンディは、一方では、生産力の無拘束な発展、……他方では、基礎としての必需品への生産者大衆の制限、という基本矛盾を感じている。」⁽⁷⁾

これら二つの叙述は、(一)生産の前進や生産力の発展にたいして、前者は資本制生産の特殊な制限一般をあげ、後者はその制限の一つとして「大衆の消費制限」をあげている点で、厳密に言えば同じものではなく、とくに前者の矛盾はあらゆる資本の矛盾に共通な一般的規定のように思える。(二)いずれも資本主義に独自の矛盾を、しかも恐慌との関連でのべたものであるから、「過剰生産の基礎」として資本の基本矛盾を規定するのであればまさにこれらの表現の通りといわなければならない。だが、(三)これら二つの叙述を含む文献はいずれも『反デュリング論』・『空想から科学へ』を執筆した当時のエンゲルスには知られていなかったものである。以上の点から、これらのマルクスの叙述をもって、エンゲルスがマルクスと異なった資本主義の「基本矛盾」のとらえ方をした、とはいえないのである。すでにみたように、エンゲルスの規定した「基本矛盾」の内容はマルクスの把握した矛盾の内容と同一である。しかも、のちに3でみるように、エンゲルスはこの「基本矛盾」の展開形態の一つとして、マルクスが「基本矛盾」とよんだ内容の矛盾を事実上あげてもいるのである。

(1) 『反デューリング論』、前掲書、二七九―二八〇、六六六ページ。

(2) マルクス「経済学批判への序説」『全集』第一三巻、六三六ページ。

(3) マルクス「オテーチエストヴェンスィエ・ザピスキ編集部への手紙」『全集』第一九巻、一一六ページ。

(4) 『剰余価値学説史』(『全集』第二六巻第三分冊) 五五一―五五二ページ。『資本論』第三巻、(『全集』第二五巻) 三三三ページ。

(5) 『剰余価値学説史』、同右、四一―一ページ。また、『資本論』第三巻、三三一ページでははっきり矛盾といっている——「資本が形成されていく一般的な社会的力と、この社会的な生産条件を支配する個々の資本家の私的な力とのあいだの矛盾は、ますます激しいものに発展し、この関係の解消を含む。なぜなら、それは同時に、生産条件を一般的で共同的な、社会的な生産条件につくりあげていくということを含んでいるからである」。

(6) 『経済学批判要綱』(高木幸二郎監訳、大月書店、第二分冊) 三四三ページ。

(7) 『剰余価値学説史』、前掲書、六三三ページ。

2 さて、このようにマルクスとエンゲルスが資本主義に独自の矛盾を同一の内容で規定しているのにたいし、レーニンの「基本矛盾」把握はこれらと少し異なっているようにみえる。その例をあげてみよう。

「このように、すべての生産は一つの社会的生産過程に結合しているが、他方で、それぞれの生産は個々の資本家によっていとなまれ、その資本家の恣意に依存し、社会的生産物はその資本家の私的所有に引きわたされている。生産の形態が取得の形態と和解しがたい矛盾におちいつていることは、明らかではないか？ 取得の形態が生産の形態に適應せざるをえず、同様に社会主義的なものにならざるをえないことは、一目瞭然としてはいないか？ ところが、……この才気ある俗物〔ミハイロフスキーのこと——引用者〕は、万事を一つの場所での作業に還元している。まったく見当ちがいというものだ！」⁽⁸⁾

この例は、「基本矛盾」という言葉はでていないが、企業間の商品売買を通じる相互依存性を「社会化」とよび、それらの商品を「社会的生産物」とよんでおり、そうしたことを強調しながらそれと資本家による私的な

取得形態との矛盾を指摘したところである。また、次の例は、恐慌論において周知の、そして山本二三九―宇高基輔氏のあいだで問題になった文章であり、またスウィーージーをしてレーニンを不比例説の支持者といわせた文章でもある。⁽⁹⁾

「われわれがとりあげている二つの恐慌理論は恐慌にたいしてまったく違った説明をあたえるものである。第一の理論が、恐慌を生産と労働者階級の消費とのあいだの矛盾から説明するのにたいして、第二の理論は、生産の社会的性格と取得の私的性格とのあいだの矛盾から説明する。……要するに、第一の理論が恐慌を不十分な消費から説明するのにたいして、第二の理論は、生産の無秩序性から説明するのである。……第二の理論は、生産と消費とのあいだの矛盾という事実、不十分な消費という事実を……十分認めている。だが、……そうした事実は、……基本的矛盾によって、すなわち生産の社会的性格と取得の私的性格とのあいだの矛盾によってひきおこされるものである恐慌を、説明することができない。」⁽¹⁰⁾

ここでレーニンは、基本矛盾から恐慌を説明することが正しいとしながら、そのことを生産の無政府性からの説明と同一視している。ここで批判されたシスモンディ流のナロードニキの過少消費説がマルクスの再生産論を理解しないものであり、レーニンはむしろ消費制限を再生産論のなかに正しく位置づけているから生産と消費との矛盾による恐慌の説明を否定していない、という宇高基輔氏の理解はその通りであるとしても、レーニンが基本矛盾からの恐慌の説明を生産の無政府性からの説明と同列においたのはなぜか、という問題がなこのころである。レーニンは同じ箇所、「この理論は恐慌を生産（資本主義によって社会化されたそれ）の社会的性格と取得の私的・個人的様式とのあいだの矛盾から説明する」と書いているので、何も基本矛盾を商品生産一般の矛盾なり無政府性一般に解消してはならない。⁽¹¹⁾とすれば、ここにはレーニンの「基本矛盾」のとらえ方における特徴があらわれているとみななければならない。すでに検討した「基本矛盾」の二つの項にかんする理解とここでと

りあげた叙述からみてレーニンは次のように考えていたのであろう。

資本主義的生産は、工場単位で直接に結合された共同労働をつくりだし、しかもそれらを全社会的範囲で結びつける（実質的社會化と形式的社會化）が、それらの成果を資本家が私的に取得することが生産の社会的関連を破壊する。つまり工場内の社会的生産をますます強めることが、生産の社会的関連を一方で強めながら他方では破壊する（無政府性の激化）。したがって、資本主義による二つの形態での生産の社會化は取得様式（取得の形態と性格の両方）の社會化を必要とするようになるのに、その必要をつくりだす資本主義的私有自体がその実現を妨げている、それゆえ資本主義的私有と取得様式は社会的所有と取得様式にとってかわられねばならない、これが資本主義の基本矛盾である、と。

このように、レーニンのいう基本矛盾のなかには、明らかに、商品生産一般に固有な矛盾、すなわち各々の私的生産者のあいだの社会的関連が彼らから独立し、無政府性という対立的な形態でのみあらわれながら貫徹していくことが、資本主義的生産に固有な矛盾——エンゲルスという基本矛盾——とともに、またそれによって普遍化されるものとして含まれている。これがレーニンによる基本矛盾のとらえ方の特徴であり、マルクスやエンゲルスのそれと異なっているようにみえる理由である。そして、この特徴からすれば、レーニンのいくつかの叙述で基本矛盾の運動形態としてただちに、何らの媒介なしに生産の無政府性がとりだされるのは当然のことなのである。先にみたように恐慌を生産の無政府性から説明するというのも、生産の無政府性が資本主義の基本矛盾を「物語っている」からであり、それゆえ恐慌が必然的なのは先の意味での基本矛盾があるからだ、ということになるのである。⁽¹²⁾

すでにみたように、『反デューリング論』ではこの点が違っている。「基本矛盾」は商品生産における社会的結びつきやその破壊としての無政府性という規定を含んでいない。それはむしろ商品生産一般と対置された資本主義独自の諸規定からなっている。では商品生産に固有な問題はどのように位置づけられているだろうか。

広く知られているように、エンゲルスは「基本矛盾」を明らかにしたあとで、この「社会的生産と資本主義的取得とのあいだの矛盾が、プロレタリアートとブルジョアジーとの対立となって明るみにでる」ことを説明しているが、そのつぎの段落であらためて商品生産それ自体をとりあげ、そのもつ諸特徴が資本主義的生産様式の「割りこみ」によって全面化され、しかも独自の形態をうけとることをのべている。それが「個々の工場内における生産の組織化と全体としての社会における生産の無政府状態との対立」であって、しかもそのときに、「基本矛盾」はこの対立として「自らを再生産する」とのべているのである。¹³⁾

それを整理すると以下のようになる。商品生産にもとづく社会はそれ独自の社会的関連とそれを規制する諸法則をもっているが、これらの法則はただ商品としての生産物の交換関係のうちのみあらわれ、そこでは無政府状態が支配して生産者たちは自分たち自身の社会的関連をコントロールできない。したがって、「これらの法則は、生産者とは独立に、彼らに対立して、彼らの生産形態の盲目的に作用する自然法則として、自己を貫徹する。生産物が生産者を支配する」。そこへ資本主義的生産様式が商品生産の新しい形態として「割りこんで」くるとともに、それまで商品生産を狭い範囲に限っていた中世の「古い絆はゆるめられ、古い閉鎖的な枠は突きやぶられ、生産者はますます独立の、ばらばらな商品生産者になっていった」。商品生産は一般化され、「こゝに資本主義的生産様式が現われるとともに……社会的生産の無政府状態が明るみにできて、ますます極端に

なっていた」。それだけではなく、資本主義的生産様式が社会全体の生産の無政府状態を強める手段はじつは無政府性とは正反対の個々の工場内における社会的生産としての組織化、計画化であった。そこで、資本主義的生産のもとでは、(一)それ自体は非商品生産的な工場内の生産の組織化と並んで、そのうえに、社会全体の生産の非組織性、無政府性が両立して存在することになり、両者は互いに条件づけあい、促進しあう。(二)しかし、他方で、工場内の生産の社会化は社会全体の生産の組織化を要求し、これに依存し、この結びつきをたえず強めるのである。それゆえ、工場内の生産の社会化は一方で社会全体の生産の社会化を強め、他方ではこの社会化を否定することになる。工場内の生産の組織化と社会全体の生産の無政府状態(非組織性)とはただ単に相並んで存在するのではなく、互いに両立するとともにまた、個々の工場内の組織性は社会全体の無政府性の解消をたえず要求せざるをえないので、両者は互いに両立しえないという矛盾関係におかれているのである。この新たな矛盾は「基本矛盾」が商品生産一般の矛盾を通過(濾過)し、それを媒介して明らかになる矛盾であり、その意味で「基本矛盾」が「自己を再生産」したものとといわれるのであるが、同時に他面からいえば商品生産に固有な私的生産と社会的生産とのあいだの矛盾の特殊資本主義的な形態として位置づけられるのである。

従来、「基本矛盾」の「現象形態」(エンゲルス)の一つであるこの現実的対立Ⅱ矛盾は、ある場合には商品生産に固有の矛盾あるいは無政府性一般の単なる増大として、他の場合には工場内の生産は組織的だが社会全体はそうではない、というように異なった主語に異なった内容が結びつくところの現実に存在する単なる抽象的対立として理解されてきたように思われる。しかしそれではこの対立の矛盾としての正しい意味はとらえられない。ここでは、エンゲルスがその矛盾の説明の際に商品生産者たちの社会的関連に言及していることに注目しなければ

ばならない。そしてこの点こそレーニンが強く指摘した商品生産の一大特徴であった。そうすれば、資本主義における「個々の工場内における生産の組織化」は社会全体の生産の結びつき・組織性を強めるとともに、この結びつきを否定（破壊）し無政府性を強めるので、無政府性は除去されなければならない、という現実の矛盾としてこの「対立」を理解できるであろう。

レーニンの「基本矛盾」で大事なことは、レーニンが工場内の集团的生産と関連させて強調した社会全体の結びつきの増大と、「この結びつきの敵対的で変動と矛盾にみちた性格」⁽¹⁴⁾（これはその結びつきの存在を否定するものではない）とが、『反デューリング論』の当該部分では独自の資本主義的な形態規定を与えられる形で叙述されているということである。つまり、レーニンが「基本矛盾」をいうとき、エンゲルスという「社会的生産と資本主義的取得とのあいだの矛盾」だけでなく、『反デューリング論』におけるこうした後の商品生産にかんする叙述、二つの現象形態の展開をも含めてこれを理解し、使用しているのであり、その意味で『反デューリング論』の叙述を一定の範囲にわたっていわば一つにまとめて「基本矛盾」をとらえているのである。こうしたレーニンの把握とエンゲルスの叙述したものとは外見上たしかに相違している。しかし、彼らの叙述のあいだの「外見上の相違は、彼らがとりあげた主題の相違、彼らが追求した課題の相違によるもの」⁽¹⁵⁾であり、マルクスも含めて彼らは「基本矛盾」の把握で内容的にまったく一致しているのである。⁽¹⁶⁾

だが、一方で、彼らのあいだの「外見上の相違」の根拠を無視し、問題に無自覚であってはならないであろう。ところが、レーニンの規定を下敷にした通説的表現——「生産の社会的性格と取得の私的資本主義的形態とのあいだの矛盾」——は資本主義に独自のものと商品生産一般に固有なものとをただ単に一つにまとめただけになっ

ており、エンゲルスの規定との差異を無視し、「基本矛盾」の正確な規定をおこなっていない。たとえば、ソ連邦科学院経済学研究所『経済学（教科書）』（改訂増補第四版、一九六二年）にはつぎのように書かれている。「資本主義が発展するにつれて、資本主義的な労働の社会化、生産の社会化がますます大がかりにすすんでいく。社会的分業も発展する。……／大規模生産がつくりだされる。……／いく百万の人びとの社会的労働の生産物が、資本家の私的所有となる。したがって、資本主義制度には深刻な矛盾が固有である。……」⁽¹⁷⁾ ここには、資本のもとでつくりだされる「直接に社会的な労働」＝「実質的社会化」が資本の枠をこえて全社会的に直接に社会的な共同労働をうちたてる物質的基礎であるという自覚がまったくなく、それと「形式的社会化」との関連も明らかでなく、商品生産一般の矛盾と資本主義に独自の矛盾とがただ混然一体となって叙述されている。

また他方、資本主義に独自の矛盾を強調するあまりに、エンゲルスとレーニンの「基本矛盾」がそもそも商品生産一般の矛盾の激化にすぎないもののように解することもまちがいである。たとえば、八尾信光氏は、エンゲルスの基本矛盾の説明の「根本問題は……資本主義的生産の矛盾が専ら商品生産の矛盾が普遍化し深刻化したもの」というふうに説明されていて、……資本主義的生産に独自の形態規定が重視されていない」ことだといわれる⁽¹⁸⁾。資本主義的生産に独自の矛盾がその基本矛盾でなければならないという氏の提起はその通りだが、エンゲルスの基本矛盾がそのようになっていないという氏の主張は全く事実にあわないものであり、こうしたエンゲルス批判が宇野理論の人々のそれとほとんど同じであるのは先に大内秀明氏についてみた通りである。また逆に、山本二三丸、岡稔両氏は、エンゲルスが資本主義以前の小商品生産では私的取得と個人的生産とが対応しあっていて矛盾が存在しえず、資本主義のもとで社会的生産が生まれ、それが私的取得と結びついてはじめて矛盾が発生する

と考えているようにいわれる。⁽¹⁹⁾これは逆に商品生産一般の矛盾をみていないか、あるいはまちがって理解しているかのどちらかであって、これらもまた『反デュリング論』の叙述の展開を正しくとらえていないといわなければならぬ。

- (8) レーニン『「人民の友」とは何か』『全集』第一巻、一七五ページ。
- (9) スウィージー『資本主義発展の理論』（都留重人訳、新評論版）二二九ページ。
- (10) レーニン『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて』（一八九七年）国民文庫新訳版、五六―五七ページ。
- (11) 八尾信光氏は、レーニンのこの主張が商品生産一般に共通する生産の無秩序性から恐慌を説明するもので「マルクス理論の妥当な概括や展開とみなすわけにはいかない」、とされるが、レーニンは何も商品生産一般の規定から恐慌を説明してはいないし、氏がいわれる文献上の制約という理由も『資本論』第三巻刊行（一八九四年）後であり、これを引用してもいるレーニンには心外なものであり、説得性をもたないであろう（同「資本主義の基本矛盾について（続）」『立教経済学論叢』第二二号、一九七八年二月、八〇―八一ページ）。
- (12) レーニン、前掲書、六一―六二ページ。
- (13) 『反デュリング論』、前掲書、二八一―二八五、六六六ページを参照。
- (14) レーニン、前掲書、一一二―一二三ページ。なお、一二七―一二八、一三一―一三二、一六二―一六三ページをも参照。
- (15) これはレーニンがマルクスとエンゲルスの国家死滅にかんする見解についてのべた一文である（『レーニン全集』第二五巻、四九四―四九五ページ）。
- (16) マルクスもまた『資本論』で、「資本主義的生産様式の社会では社会的分業の無政府性とマニユファクチュア的作業の専制とが互いに条件づけあう」とのべ、資本家たちがいかに「社会的生産過程のいっさいの意識的社会的な管理と規制」を非難するかを語っている（『資本論』第一巻、前掲書、四六五―四六八ページを参照）。
- (17) ソ連邦科学院経済学研究所『経済学教科書』（改訂増補第四版、邦訳、合同新書版、第一分冊、一九六三年）二二

○ページ。

(18) 八尾信光、前掲論文、八四―八五ページ。

(19) 山本二三九「資本主義の基本矛盾についての簡単な考察(完)」(『立教経済学研究』第九卷第一号)二八ページ、ならびに、岡稔「恐慌理論の問題点」(同『資本主義分析の理論的諸問題』新評論、所収)五四ページ。岡氏は資本主義の基本矛盾と商品生産の矛盾とはっきり区別する必要を指摘されながら、エンゲルスとレーニンの差違をつつこんでは考察しておられない。

3 最後に、「資本矛盾」それ自体の意味について考えてみたい。

第一に、従来から、これもまた生産は社会的で取得は私的あるいは資本主義的というように、異なる主語に異なった述語を配してこれをもって矛盾を規定したかのようを考える傾向が多い。はじめに紹介した宇野弘藏氏などはエンゲルスの基本矛盾をこうした単なる対立だと理解したうえで、これでは資本主義の運動や発展の動力にならないといつてエンゲルスを批判される。しかし、これらはいずれもその矛盾としての本性を正しく認識していないのである。

見田石介氏が明らかにされたように、資本主義の基本矛盾はつぎのような意味で論理的矛盾としてつかまれる現実の矛盾である。⁽²⁰⁾一方の社会的生産は他方の資本主義的取得の生産力的基礎としてこれを強化・発展させる最大の手段であり、したがってまた資本主義的取得は自らの目的のために社会的生産を最大に発展させ促進する。ここには二つのものが互いに前提し促進しあう関係(両立性)がある。ところが、生産の社会化は社会主義社会の主体的・物質的要素をつくりだし、そのことから、資本主義的私有をとりのぞき生産手段・生産物の所有―取得関係の社会化を自らに照応するものとして要求するのにたいし、資本主義的私有はこの要求を妨げるといふ関係

資本主義の基本矛盾について(角田)

四四三(九二七)

(非両立性)がある。だから、資本主義的生産様式は自らを止揚にみちびく要素を自らつくりだし発展させないではおれないという矛盾物であり、その死滅を通じて社会的生産様式に転化せざるをえないのである。矛盾はたんなる対立でも、たんなる闘争でもなく、対立物の統一と闘争だから矛盾なのである。

第二に、「基本矛盾」をこのようにとらえることによって、資本のもとで「直接に社会的なまたは共同的な労働」(本稿二を参照)を担う労働者が資本の私的な榨をとりぬき、資本のもとで共同的で社会化されてきた生産手段を自分たちのものとし、その個人的労働力を意識的に一つの社会的労働力として支出する自由な人間の結合体をつくりあげるといふ変革のすじ道を示すことができる。そして、「社会が生産手段を掌握し、生産のために直接に社会化して、それらを使うようになるやいなや、各人の労働は、はじめから直接に社会的な労働となる。」⁽²¹⁾つまりこの「基本矛盾」にもとづいて、資本主義社会の変革の諸条件と歴史的必然性を示し、行動すべき階級に自らの使命、条件、本性を自覚させることができるのである。ところが宇野弘藏氏によると、「生産の社会的性格と取得の個人的性格との矛盾の止揚ということだけでは、ことによると社会主義をたんなる計画経済に解消してしまふ、おそれがないとはいえない」⁽²²⁾という。もちろん労働力商品化の廃棄は生産手段や生活手段の商品化・資本化の廃棄とともに資本関係廃棄の一大モメントであるが、そのことはエンゲルスの基本矛盾に当然含まれている。宇野氏らの批判はそもそもエンゲルスの基本矛盾を「商品経済的に一面的な」(宇野)ものに自らしたてあげておいてこれを批判するという非科学的なものである。まして、現存のとくにソ連社会主義のあり様をこの「基本矛盾」の特定の理解に結びつけるようなやり方はイデオロギー的でさえある。そうではなく、われわれはこの「基本矛盾」の正確な理解のうえにたつて、とくに生産の社会化の進展と社会的所有の実質化という点にそ

くして現存社会主義の諸タイプを科学的に分析するべきであろう。⁽²³⁾

第三に、エンゲルスの「基本矛盾」からは資本主義的生産様式の枠内での運動がでてこないという批判的意見があるが、前述のようにその矛盾としての本性をとらえることによって、かえってそれが資本主義的生産様式の枠（制限）からの解放を促進しながらその枠内にとどめられる場合の運動形態を明らかにできると考える。その一つは恐慌―産業循環の説明であって、資本主義的取得という目的の追求が生産の無政府性を「推進力」として社会的生産の最大限の発展を手段としつつ、他方では最大限の価値増殖という目的によって消費を抑制する。そのため、市場の拡大は大工業の巨大な膨張力と歩調を合わせることができず、生産の拡大と市場の拡大とのあいだに衝突が避けられない。「そして、この衝突は、資本主義的生産様式そのものを爆破しないかぎり、なんの解決も生みだせないから、衝突は周期的に繰り返かえされる」⁽²⁴⁾。このように、恐慌は「基本矛盾」の生き生きした展開によって説明されるのであって、この意味で、先にマルクスが「過剰生産の基礎」として「発展した資本の基本矛盾」とよんだ内容とエンゲルスの「基本矛盾」の展開とは基本的に一致しているし、それらはともに「生きてゐる矛盾」⁽²⁵⁾（マルクス）として表明されるものである。二つめに、生産の社会的な本性が資本主義の枠内で可能なかぎり実際に承認されざるをえなくなり、株式会社や国家的所有・管理など「大量の生産手段の社会化の形態」（エンゲルス）に向かうということやそれらがいっそう資本主義的取得を強める手段になるということも、「基本矛盾」の資本主義的枠内における一つの運動形態として当然でてくるのではなからうか。たとえば、個別資本が社会的生産を包摂するとともに包摂しきれないものとして現代資本主義をとらえることが大切である。都留重人氏は、資本範疇展開の新しい段階として、個別資本による市場の包摂傾向をあげられた。すなわち、個別

資本が科学を包摂し、経営規模を巨大化し、社内留保を含む管理価格制を採用して価格のパロメーター機能を変え、「依存効果」をとおして消費者をもとりこみ、巨大企業にふさわしい計画性を活用しながら国家権力をも包摂する、というもので、それが資本の自己否定を用意するのではないか、というのがその問題提起であった。⁽²⁶⁾ また、北村洋基氏は、現代資本主義の生産力構造の特徴の一つとしてオートメーションの登場と普及をとりあげ、にもかかわらず「オートメーションが新しい生産力段階を画定するためには、オートメーション自体の技術的發展とともに、社会的生産過程を個別資本の枠に分断している資本主義的生産関係の変革が前提とならなければならない。それは、生産の社会化と私的資本主義的所有との矛盾という資本主義の基本矛盾の、まさに現段階的到達点における内容規定をなすとさえいえる」といわれている。⁽²⁷⁾

(20) 見田石介「論理的矛盾と現実の矛盾」（見田石介著作集）第一巻、大月書店、一九七六年、所収）を参照。

(21) 『反デューリング論』、前掲書、三二八ページ。

(22) 宇野弘蔵「『資本論』と社会主義」（『宇野弘蔵著作集』第一〇巻、岩波書店、一九七四年、所収）一七六一—七七ページ。大内秀明氏もまったく同じことをいわれるが、氏はさらに、構造改革論の根源にはエンゲルスの「基本矛盾」規定があるとなえいわれて、エンゲルスを構造改革論の祖にしてしまわれる。（『景気と恐慌』、前掲、五五—五八ページ、同『宇野経済学の基本問題』現代評論社、一九七一年、九一ページ）。

(23) この点では芦田文夫氏の最近の論稿が参考になる——同『生産の社会化』と社会主義的所有（『経済論叢』第一二七巻第一号、一九八一年一月、および長砂実・芦田文夫編『ソ連社会主義論』大月書店、一九八一年、第一章（芦田文夫執筆））。

(24) 『反デューリング論』、前掲書、二八四ページ。

(25) このことは見田石介氏が指摘された点である（同「久留間鮫造編『マルクス経済学レキシコン』⑦恐慌Ⅱを読んで」

『見田石介著作集』第五卷、一九七七年、二七七ページ)。この点では高木彰氏の前掲第二論文の五九一六〇、六二ページの考へに賛成する。

(26) 都留重人「『資本』による『市場』の包摂——資本主義の新しい段階——」(『都留重人著作集』第三卷、講談社、一九七五年、所収)。

(27) 北村洋基「現代資本主義分析の方法と技術論」(『経済科学通信』第三二号、一九八一年九月、所収)七五―七六ページ。北村氏のオートメーション評価は、同「技術発展の諸段階」(『商学論集』第四六卷第三号、一九七七年二月)を参照されたい。

六 あとがき

本稿では、エンゲルスの「基本矛盾」について古典におけるその概念内容に課題を絞って考察してきた。ここでその要点を整理すると大体次のようになる。1. エンゲルスのいう「社会的生産」とは個々の工場(企業)内の生産の実質的社会的化のことであり、資本主義に独自の生産様式のことである。マルクスはこれを労働の面から「直接に社会的な労働」と規定し、資本自身が創造し、資本の枠を打破して全社会的な共同労働となるべき物質的要素ととらえている。2. 商品交換を通して実現される私的労働の形式的社会性は、エンゲルスの「基本矛盾」の規定には入っておらず、マルクスとエンゲルスはともに商品生産の資本制生産への転化とあわせてこの形式的社会化が実質的社会的化に転化することの意義を強調した。3. これにたいしレーニンは、資本主義による労働の社会化をいうとき必ずこれら二つの社会化の意味を含ませ、その基本矛盾の一項である生産の社会的性格にもこの両方を含めているが、それはどちらか一方に重点をおくとか、エンゲルスの規定の拡大解釈だとかいうものでは

ない。レーニンはつねに具体的な資本主義の生成・発展をとりあげ、これを追求する課題のなかで「基本矛盾」にふれているので、資本主義独自の特徴や矛盾と商品生産のそれとを区別しながらもつねにそれらを関連させ並行させてとりあげている。4. 「基本矛盾」のもう一つの項である「資本主義的取得」は、エンゲルスやマルクスの場合、私的取得形態一般ではないし、それに還元したこともない。⁽¹⁾レーニンの場合はたしかに私的所有一般のよりに表現していることが多いが、その意味するところは私有の極致としての資本主義的取得である。5. エンゲルスの「基本矛盾」はたしかに資本制生産のあらゆる他の矛盾とならぶ一つの特異な矛盾であるが、それらの矛盾との有機的関連のなかで、それらに照明をあて、それらを規定する普遍的矛盾という弁証法的関連・位置にある。マルクスも同一の内容を矛盾関係でとらえていることは明らかであって、それを基本矛盾とよんでいないことは何もエンゲルスの規定を否定する根拠にはならない。エンゲルスが知る機会のなかつた草稿においてマルクスのべた基本矛盾についていえば、これは資本制生産に固有な諸制限とこれをのりこえようとする資本の傾向とのあいだの矛盾という規定であり、資本のあらゆる矛盾に共通する、その意味で抽象的・一般的な基礎を規定したものであって、たとえば生産の社会化にも生産の無制限な拡大発展傾向にも共通するものである。したがって、そういう一般的な規定をもつ矛盾ではなく、様々な特殊な矛盾を展開しようとするときには、やはりエンゲルスの「基本矛盾」の内容が資本制の矛盾全体を総括する位置にたつてであろう。6. レーニンの「基本矛盾」は、『反デューリング論』における叙述の展開、すなわち、資本主義の基本矛盾↓階級対立↓商品生産一般の矛盾↓工場内の生産の組織化と社会全体の生産の無政府性との対立、をふまえ、この展開をすべて含んだ内容で使われている。つまりエンゲルスのいう「基本矛盾」をその「現象形態」を含めて用いている。このことは不当なこ

とであろうか。そうではない。われわれは、レーニンが展開しようとしているところであたかも彼が定義しようとしているかのように考え、またおよそレーニンに固定したできあいの絶対的に妥当する定義を求められるかのように考えてはならない（これはエンゲルスがマルクスの叙述についてのべた注意である）。⁽²⁾ 7. エンゲルスの「基本矛盾」を生きた矛盾として把握せず、資本制生産の発展やその歴史的傾向に位置づけず、恐慌（産業循環）の説明に何らつながらないとする見解はいずれも「基本矛盾」の矛盾としての本性（対立物の両立性と非両立性の同時存在）を理解しないところからくるものである。「基本矛盾」を生きた矛盾として把握することによって、たとえば「生産と消費の矛盾」を正しく規定し、社会変革の主体的・客観的根拠（条件）を明らかにし、資本制生産の枠内での運動形態の意味をとらえることができるであろう。一般的にいつて資本主義の様々な発展形態にはそれぞれに固有の矛盾が存在するといえよう。「基本矛盾」はそれらと並ぶ特殊な矛盾の一つであり、同時に全体を総括する矛盾であるから、基本矛盾なのである。経済学がその対象の様々な発展形態を分析し、それらのあいだのつながりを明らかにしたうえで、現実の運動をそれに応じて叙述するとき、それは「基本矛盾」から様々に特殊な矛盾をアプリアリに構成していくように見えるかもしれない。しかし、それは研究素材の十分な分析をすませたうえで可能なことであり、エンゲルスの『反デューリング論』における叙述はまさにこの意味でマルクスの『資本論』を前提していたのであり、その「基本矛盾」規定もそれによって可能となったものである。

(1) 大野節夫「エンゲルスの基本矛盾論の検討」（『唯物論研究』第三号、一九八〇年十一月）は、エンゲルスの「基本矛盾」の問題点として、①社会的生産と私的取得とを両立不可能性としてだけとらえていること、②資本家的取得を私的取得に還元していること、③生産と取得とのあいだの関係に矛盾を求めていること、を指摘しているが、本稿の

論旨からいってそのエンゲルス批判には賛成できない。

(2) エンゲルス「資本論第三部の序文」〔全集〕第二五卷a）一九ページ。

〔付記〕——本稿は以前に上野俊樹氏と共同で発表した「古典研究 エンゲルス「反デューリング論」2 経済学」〔経済〕一九七八年九月号）のうち筆者が担当した部分の素原稿に手を加えたものである。雑誌の性格や紙数の関係で割愛したまゝ、えがきと注ならびに本文の一部をあらたにし、それぞれに補正をおこなった。稿を改めるにあたって、上野氏と『経済』編集部¹の了解をえたこと、また旧稿にたいし学内外の研究會の方々から有益な御意見を多数いただいたことに感謝したい。〕